

黙示録20章 「キリストによる地上統治」

1A 悪魔に対する裁き 1-10

1B 竜の幽閉 1-3

2B 聖徒たちの共同統治 4-6

3B ゴグとマゴグの惑わし 7-10

2A いのちの書に従った裁き 11-15

1B 大きな白い御座 11-13

2B 投げ込まれる死と陰府 14-15

本文

黙示録 20 章に入ります。私たちは、これから聖書全体にある、神のご計画、救いの完成の部分に差しかかっています。すなわち、主がさばくために地上に来られ、それで主が王となるということです。預言者たちが、数多く予め語ったことがついにその通りになるところです。章としては短いですが、この膨大な預言が背景にある箇所です。また、新約聖書では、福音書でイエスが、弟子たちに祈れと命じられた、「御国が来ますように」という祈りの実現です。使徒の働きでは、ペテロが「回復の時」「万物が改まる時」(3:20-21)と表現しました。

アダムが、罪を犯して、土地が呪われたものとなって以来、かつてのエデンの園のように回復すること、いやそれ以上に回復し、神を王とする国がキリストにあって世界に広がる姿です。それを、ここ 20 章は千年の間という期間が書かれているので、しばしば「千年王国」と呼ばれる部分です。

1A 悪魔に対する裁き 1-10

1B 竜の幽閉 1-3

¹また私は、御使いが底知れぬ所の鍵と大きな鎖を手にして、天から下って来るのを見た。²彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、³千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように、底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけ、その上に封印をした。その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる。

御使いが天から下って来ています。そして、「底知れぬ所」の鍵と大きな鎖を手に入れています。底知れぬ所は、悪霊どもが縛られているところ、地獄の一つであることを以前、お話ししました。「9:1 第五の御使いがラツパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。その星には、底知れぬ所に通じる穴の鍵が与えられた。」とありましたね。その時は、その底知れぬ所には王がおり、その王が、ヘブル語でアバドン(破壊)、ギリシア語でアポリュオン(破壊者)と呼ばれているとあります。これが悪魔です。9 章においては、悪魔がこの鍵を持っていましたが、今は

御使いが持っており、悪魔自身を底知れぬ所に閉じ込めるのです。

私たちは、どのようにして神の国が初めに損なわれたかを思い出さないといけません。アダムが罪を犯したのですが、それはエバが蛇に惑わされて、善悪の知識の木から出る実を食べたからに他なりません。その悪魔が、今、底知れぬ所に鎖で縛られることとなります。ですから、人が罪を犯す機会というものが、一気に減ります。そして、前回見ましたように、キリストは鉄の杖で諸国を牧します。反抗する者たちがいれば、たちまち滅ぼされます。ですから、悪魔が縛られている間は、ほぼ完全な状態になるのです。主が初めに意図されていた世界に、回復するのです。

主がエルサレムに戻ってこられて、そこに神殿が建てられ、そこから主は王として治められます。諸国の民は、主の教えを学ぶためにエルサレムに参拝しに行きます。そこで、戦争がなくなります。「イザ 2:4 主は国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない。」人だけでなく、動物においても弱肉強食がなくなります。午前礼拝で読みましたが、獅子が草を食んで、赤ん坊がコブラの穴に手を入れても害を受けません。(11:6-9)。荒野には緑が満ちます。「51:3 まことに、【主】はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰めて、その荒野をエデンのようにし、その砂漠を【主】の園のようにする。そこには楽しみと喜びがあり、感謝と歌声がある。」長寿が約束されています。「65:20 そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命を全うしない老人もいない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。」罪が赦され、また病もなくなります。「33:24 そこに住む者は「私は病気だ」とは言わず、そこに住む民の咎は除かれる。」

お分かりですね、今、私たち人類がこの地球における大きな問題として取り組んでいる事柄すべてを、すべて網羅しているのです。このことが、キリストが王となって世界を治める時、キリストにあって回復された者たち、贖われた者たちによって可能になるのです。

そして大事なのは、地上における神の国は、神がアブラハムに約束されたこと、契約を結ばれたことに基づいて実現されるということです。今、挙げたいろいろな預言は、そのほとんどがイスラエルやエルサレムに関わる預言の中で出てくるものです。ユダヤ人たちの間では、この幻がかなり鮮明になっています。「ティクン・オラム」とも呼ばれ、「世界の修復」と訳されます。だから、弟子たちがイエスが復活された後に、「主よ。イスラエルのために国を再興して下さるのは、この時なのですか。(使徒 1:6)」と尋ねたのです。

私は、昨年、エルサレムを訪問した時に、Shalva という障害者施設に行きました。ユダヤ教正統派の方が運営されていますが、国内だけでなく、障害者の中では世界中に知られている施設です。とにかくすごかったのですが、何がすごいかというと、ダウン症の子とか、とにかく生き活きとしていて、まるで夢の国にいるかのように明るいのです。そこでボランティアをしているブラジル人の

若い子がいました。英語では、I'm addicted to Shalva.と言っていました。シャルバにはまっている、ということです。健常者が障害者を受け入れているのではなく、障害者たちのところに健常者が加えさせてもらっている、という考えです。

私は思い起こしました。イザヤの預言です。「35:6 そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水が湧き出し、荒れ地に川が流れるからだ。」この終わりの日の姿を逆算して、今に持ってきていると思ったのです。そのことを分かち合ったら、ユダヤ教正統派である所長さんは、とても喜んでいました。イエスが地上で行われていた時に、彼らはこのイザヤの預言を目の当たりに見て、確かに神の国が来たと感じたし、そして、イエスが再び来られたら、この逆転を確実に行われるのです。

このように、終わりの日の神の国の幻は、決して概念的なもの、抽象的なものではなく、信仰の中で今、温めていくものであり、時に実践していくものなのです。

ところで、なぜ千年という期間なのか？を考えたいと思います。創世記 5 章のことを思い出してください。アダムが罪を犯したことによって、彼らが永遠に生きられないようになりました。神の国は彼が罪を犯したことによって、損なわれてしまいました。それで、アダムは 930 年行きました。千年に、七十年足りない年齢で死にました。その後の息子たちでは、メシェラが最長で 969 年行きましたが、千年に満ちなかったのです。主は、このことを意識しておられます。アダムによって損なわれた御国におけるいのちを、ここで取り戻す、回復させるということがあるでしょう。

もう一つの大きな疑問は、悪魔が、千年の後に解き放たれることです。これは、神が人をご自分のかたちに似せて造られたということに深く関わります。そもそも、園の中央に、いのちの木だけでなく、善悪の知識の木を生えさせたのか？という疑問になります。それに答えられると、悪魔が最後に解き放たれる意味が分かります。主は、ご自分の意志があります。その意志を意味あるものとして働かせるときに、神の言われることに従わない選択肢も造らないといけません。それで、悪魔がエバを惑わすということも許容されていたのです。そしてアダムは、背く選択をしてしまい、それで世界に罪が入り、死が入るという大混乱に陥ったわけですが、それでも、主のかたちが損なわれることがあってはならないのです。

ですから、強制改宗というのは全く意味がないどころか、神のかたちに造られた人に対してやっではいけないことです。主が、聖霊によって一人一人に罪の自覚を与え、十字架につけられたキリストを示し、それで一人一人が悔い改めて、主を信じて、バプテスマを受けるという決断を尊ばれるのです。そこには神のキリストにある愛があり、そして私たちも主を愛するという応答があります。もし、選択肢がなければ、その愛がなくなってしまうのです。

神の国においては、悪魔が縛られています。そして主イエスが、鉄の杖をもつと世界を治められます。ですから、ほぼ完全な状態です。これから見ていきますが、第一の復活にあずかる人々は、栄光のからだを持っているので、罪を犯すことはありません。けれども、マタイ 25 章には、大患難を通り抜けた諸国の民で、羊として選り分けられた人々がいます。彼らは、御国に入れられます。その人たちは生身の体を持っています、復活していません。そして、先ほど話しましたように、長寿が約束されています。ですから、千年期において子孫がどんどん増え広がります。しかし、かつてのように悪魔による誘惑がないので、罪をあからさまに犯すことはないし、仮に神に反抗したとしても、厳しく罰せられます。

分かりやすく言えば、敬虔なキリスト者の親で、周囲も敬虔なキリスト者で、全く守られた環境で育てられた人々のようです。けれども、本人たちが本当に信じているかどうか、どうやったらわかるでしょうか？そう、そうではない選択肢が与えられている時です。それが、悪魔の解き放たれる理由です。千年期の終わりに、主を本当に知っているのかどうか、試されるのです。それから、最後の審判を全ての人が受けることになります。

2B 聖徒たちの共同統治 4-6

⁴ また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。また私は、イエスの証しと神のこぼのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。

キリストと共に座が与えられ、この方とともに千年の間、神の国を治めるという預言です。これは、端的に言うなら「神の国を相続する」ということです。その原型になっているが、アダムに与えられた神の命令であり、「創 1:26 さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」というところです。主の造られたものを支配するように命じておられます。私たちが人は、主から任され、その任されたものを治めるというところに、尊厳があります。そこに、人が人として造られているところの真骨頂があります。子が何かを相続する時に、父に代わってそれを治めるのですから、神の国を相続するというのは、神の子として治めるのです。

それで主は、アブラハムを選ばれた時に、その子孫に約束の地を与え、そこからメシアを出し、メシアによってその国を治めるようにされました。それがイスラエルです。そして、キリストにあつてこの約束にあずかっている異邦人の私たちも、世界を相続するように召されています。これをもって、私たちは「救われている」という言葉を使っています。死んで天国に行つて、いい所に入れるという意味でしか使っていないのであれば、大きな間違いです。ですから、主に与えられたタラントを用いて、主の栄光のために、イエスの名によって与えられたことを行つていく、治めていくことは、

将来の救いに直結していることだと思ってください。

そして、このことが復活によって成し遂げられます。人は、すべてが罪と死の中に入れられています。しかしキリストが来られて、罪と死の支配の力を打ち破りました。この方が、罪のために死なれ、死そのものに打ち勝ち、よみがえられました。そのいのちによって、人々を治められるのです。そして今度は、キリストにある者が新しく御霊によって生まれ、自分に与えられたものを自分のためではなく主のために用いることによって、治めています。それだけでなく、この肉体が朽ちても、キリストが来られた時に、よみがえり、そして主が地上に戻られて神の国を治められる時に、共に治めるのです。(ロマ 8:21-23 参照)

そして、その順番ですが、今、話しましたように、まずキリストです。そしてキリストにある者たちが次に復活します。「I コリ 15:23 しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです。」キリストが天から降りて来られる時に、キリストにある死者がよみがえります。来られる時に、生き残っていたのであれば、一瞬に栄光のからだに変えられて、そこで復活と同じようにされるのです。「I テサ 4:15-17 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、17a それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。」

本文をもう一度、見てください。注意深く見ますと、二つのグループに分かれています。初めに、「多くの座を見た」とありますね。それから、「また私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。」とあります。

初めの「多くの座」というのが教会です。イエスが、ラオディキアにある教会に対して、「3:21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」と約束されています。そしてパウロは、コリント第一にてこう言っています。「6:2-3 聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるのに、あなたがたには、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。あなたがたは知らないのですか。私たちは御使いたちをさばくようになります。それなら、日常の事柄は言うまでもないではありませんか。」イエスが再臨されて神の国を立てられてから、教会はイエスと同じように裁きの座に着きます。

そしてもう一つが、大患難の時にイエスの御名のゆえに殉教した人々です。私たちが黙示録で、

ずっと見てきた、獣の国で像を拜まなかったのが、殺されていった聖徒たちです。教会の人々はすでに復活したからだを持っていますが、殉教者たちは主が戻ってこられる時に復活します。

実は、ここには書かれていませんが、旧約時代からの聖徒についても復活が約束されています。すでに、主が復活された時にその一部が墓から出てきました。「マタイ 27:51-53 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いて、眠りについてた多くの聖なる人々のからだが生き返った。彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。」

エペソ 4 章には、イエスが天に昇られる時に、多くの捕虜を連れて行かれた、ということを使徒パウロは言及しています(4:8-9)。大患難が終わって、イエスが再臨された時に彼らは復活します。「ダニエル 12:1-2 その時、あなたの国の人々を守る大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかしその時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる。ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」イエスも、このダニエルの預言を思いつつ、よみがえりについて語られています。「ヨハ 5:28-29 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」

⁵ 残りの死者は、千年が終わるまでは生き返らなかった。これが第一の復活である。

これが午前礼拝でお話したことです。今、話したこと、キリストがよみがえられ、復活の初穂とされたこと。そしてキリストが来られる時に、キリストにある者たちが復活すること。そして、大患難において殉教した人々がよみがえること。また、旧約時代の聖徒たちもここでよみがえること。これをもって、すべて「第一の復活」と呼びます。

そして、先に読んだ、ダニエルの預言とイエスのみことばに、永遠のいのちに至るよみがえりだけでなく、永遠の嫌悪、あるいは裁きを受けるためのよみがえりもあることがありました。これは、「第二の復活」と呼んでもよいでしょう。第一の復活が、永遠のいのちに至る復活で、第二の復活が、永遠の滅びに至る復活です。後者については、11 節以降に出てきます。

⁶ この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対して、第二の死は何の力も持っていない。彼らは神とキリストの祭司となり、キリストとともに千年の間、王として治める。

第一の復活にあずかる者が「幸いな者、聖なる者」であるとありますが、それはキリストに似た者とされているからです。罪のないからだを持っています。そして「第二の死は、何の力も持ってい

ない」とありますが、第二の死については 14 節に書かれていますので、そのとき詳しく説明します。

そして、彼らが、神とキリストの祭司となり、また王としてキリストとともに治めるのです。祭司であり王であるという召しについて、あまり教会で強調されていないことは残念です。聖書には、主の民であるイスラエルに対して、この大きな召しを与えておられます。「出 19:6 あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」この召しを、キリストにあつて異邦人もあずかるようになるというのが、新約聖書の啓示です(エペソ 2 章参照)。ペテロは、第一の手紙でユダヤ人だけでなく異邦人もいる教会に対して、こう語りました。「2:9 しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。」そして、黙示録は、この召しを前面に出して、キリストが教会に出しておられる使信であります。「1:6 また、ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。」

王については、先ほど説明しました。神が人を造られた時、神のかたちに似せて造られたゆえに、治めることが召しです。そして、祭司についてですが、これは神と人との仲介者です。神の前に出る時に、人を執り成すことです。人の前に出る時に、神の前に出て与えられた恵みを携えて、それで祝福します。つまり、私たちの大きな務めは、主の前に出ることなのです。主から恵みを受け、祝福されて、それを今度は人々の前に分かち合っていきます。これが祭司です。また、人々の必要を知り、その必要を携えて、神の前に祈っていく者たちです。そのようにして、私たちが神の祭司の務めを果たして、神の恵みと祝福の流れが世界に入ります。こうやって、神の御国が広がっていきます。これを、「祭司の王国」と呼ぶのです。

私たちが個人主義的な信仰であってはいけないことが、ここから分かりますね。主の前に礼拝を献げること自体が、神の支配が自分の周りに及んでいくための第一歩なのです。そして、私たちが人々に寄り添い、そして神に代わって祈ることが次にすることです。そうやって、神の国が広がっていきます。

3B ゴグとマゴグの惑わし 7-10

⁷しかし、千年が終わると、サタンはその牢から解き放たれ、⁸地の四方にいる諸国の民を、すなわちゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海の砂のようである。

千年期が終わる時、サタンが底知れぬ所の牢から解き放たれました。すると、なんと世界中の諸国の民が惑わされます。その様は、「ゴグとマゴグ」のようであります。

ゴグとマゴグの戦いは、エゼキエル 38-39 章に書いてあります。その箇所や前後を見ますと、それらは明らかに、地上における神の国が建てられる前、キリストが再来される前に起こります。イスラエルが、マゴグの地のゴグによって率えられる軍勢によって襲われそうになります。ペルシアやベテ・トガルマ、ゴメル、クシュ、プトなども合わせて襲ってきます。その他にも諸国が一斉に襲ってきます。これを、イスラエルが、その地に安住している時に起こります。しかし、神は地震などによって滅ぼされます。その残骸を燃焼させるのに七年間かかるとあります。その後で、40 章以降には、エルサレムに新しい神殿が建てられます。実に 48 章に至るまで神殿とエルサレム、また十二部族の割り当てなど、明らかにイスラエルの回復の幻、千年王国になっています。

ゴグとマゴグの戦いがここに書かれているから、エゼキエルの幻も千年王国の終わりに起こるのだという人たちがいますが、これらの点で明らかに違います。

しかし、千年王国の終わりに起こる、地の四方から諸国の民が、戦いにために集まり、そして大勢集まって来るということについては、ゴグとマゴグのようであるということです。例えば、私たちは関ヶ原の戦いは歴史上起こったこととして知っていますが、天下分け目の戦いなどと言って、大きな分岐点となる出来事の時に使いますね。それと同じように、ゴグとマゴグの戦いを思い出すものとして、千年王国の終わりに戦いが起こることを示しているのです。

⁹ 彼らは地の広いところに行って行き、聖徒たちの陣営と、愛された都を包囲した。すると天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。

「地の広いところ」ということですが、終わりの日の神の都、エルサレムは、イエスが再来される時に、そこだけが高くなり、周りは低い平地とさせることがゼカリヤ書に書かれています(14:10)。

そして「聖徒たちの陣営」という言葉が興味深いです。陣営と言っても、武器を持っているわけはありません。かつてのイスラエルの民が荒野で宿営している時に、バラムが呪おうとしてもそれを神が祝福に変えられたように、霊的な防衛を聖徒たちは持っています。エルサレムは、主ご自身が炎の城壁を置いてくださる町となります。「2:4-5 彼に言った。「走って行って、あの若い者にこう告げよ。『エルサレムは、その中に人と家畜があふれ、城壁のない町のようになる。わたしが――【主】のことば――それを取り巻く火の城壁となる。わたしがそのただ中で栄光となる。』」

そして「愛された都」です。ゼカリヤ書に色濃く、その神の御思いが書かれています。「1:14-15 わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。しかし、わたしは大いに怒る。安逸を貪っている国々に対して。わたしが少ししか怒らないでいると、彼らは欲するままに悪事を行った。」主は、エルサレムを妬むほど愛され、触れるものがあるならば、火をもって裁かれるのです。

¹⁰ 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

ついに、悪魔が「火と硫黄の池に投げ込まれた」とあります。彼がいるべきところとして神が造られたのが地獄です。マタイ 25 章 41 節に、「悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。」とあります。そこにはすでに、千年期の前に投げ入れられている獣と偽預言者がいます。「世々限りなく苦しみを受ける」のです、と言っています。しかも、昼も夜もと強調しているので、絶えずということですから、休息はありません。

2A いのちの書に従った裁き 11-15

ところが、悪魔とその使いのために造られた火と硫黄の池、またはゲヘナとも呼ばれますが、ここに多くの人々も投げ込まれることとなります。それは、惑わされ、悪魔の偽りに追従したからです。これまで私たちは、黙示録で、神が何度となく、災いの中にいる者たちに悔い改める機会を与えておられたのに、かえって神を冒瀆している姿が出てきました。自ら、その道を選び取るのです。多くの人が、「神が愛だというなら、どうして地獄に人々を送り込むのか？」と批判するのですが、いやいや、本人たちがその偽りを愛しているから、選び取っているからなのだという事なのです。

主は、神の裁きについて次のように言われました。「ヨハ 3:18-20 御子を信じる者はさばかれな
い。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。19 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」先に話したとおり、神はご自分のかたちに人を造られたので、光よりも闇を愛するという選択も尊重しなければならないのです。それゆえ、闇を選び取りたい人にはそうさせるしかならず、それで、滅びに至る人が多くいるということです。

1B 大きな白い御座 11-13

¹¹ また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。

これが、しばしば「最後の審判」と呼ばれるものです。まず、「大きな白い御座」とありますが、偉大な、力ある、畏れ多いという意味で「大きな」とあります。そして、これが「白い」とあります。これは、光り輝く方であられ、あまりにもその光が強いので、白くなっている状態です(1テモテ 6:16)。

聖書は、何度も何度も、私たちが神の御前に出て、申し開きをすることを教えています。「ヘブル 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」そして、「ロマ 2:16 私の福音によ

れば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」私たちがしていること、行なっていることの全てが、神の御前に持って行かれるのだということでもあります。

そして、「地と天はその御前から逃げ去」とありますね。地上の神の国、千年王国においては、その天と地はあくまでも改まったものであって、刷新されたものです。「使徒 3:21 このイエスは、神が昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた、万物が改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。」とペテロは言っています。これは「改まった」ということで、古い天と地の秩序でありました。ところが今、これらが過ぎ去ります。

次回 21 章で新しい天、新しい地について見ていきます。そこで、ペテロが全く新しくされる神の働きを、預言しています。「2ペテロ 3:10-12 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまいます。このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならないことでしょう。そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」天の万象が崩れます。イエス様も、天と地は過ぎ去るけれども、わたしのことばは決して過ぎ去らないと言われました。

ヘブル書においても、ハガイの預言を取り上げてこう話しています。「ヘブル 12:26-27 あのときは御声が地を揺り動かしましたが、今は、こう約束しておられます。「もう一度、わたしは、地だけではなく天も揺り動かす。」この「もう一度」ということばは、揺り動かされないものが残るために、揺り動かされるもの、すなわち造られたものが取り除かれることを示しています。」この「もう一度」ということばは、決して揺り動かされることのないものが残るために、すべての造られた、揺り動かされるものが取り除かれることを示しています。」聖書ははっきりと、今のものは過ぎ去り、けれども決して揺り動かされることのない御国が与えられることを教えています。

¹² また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。

ここに、いわば「第二の復活」が書かれています。私たちはすでに、「第一の復活」についてみました。第一の復活は「幸い」とありましたが、第二の復活は災いです。神の法廷に出るための復活であります。死んだら終わり、地上で行った悪については問われることはない、ということではないのです。死後の魂に対して、主はハデスという監獄に閉じ込め、それから復活させて、この最後の審判で、申し開きさせるのです。

「大きい者も小さい者も御座の前に立っている」と言っていますが、これは立場によって裁きが変わるわけではないということです。神はえこひいきしない方です。全ての人が、どんな影響力があろうとも、主の前に出てこないといけないということです。

次に、「数々の書物が開かれた」とあります。主は、すべてのことを記録しておられる、すべてを覚えておられるということです。ダビデはこう言いました。「詩篇 139:16 あなたの目は胎児の私を見られあなたの書物にすべてが記されました。私のために作られた日々がしかもその一日もないうちに。」このように、たくさんを神は書物に書き記しておられます。

そして、「書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった」とあります。そうです、自分のしてきたこと、その行ないについての書物は数々あるけれども、その原則とは異なる、「いのちの書」というものがあります。他の箇所では「屠られた子羊のいのちの書」とありました(13:8)。自分の名が、そこに記録されていれば、キリストにある永遠のいのちにあずかり、そうでなければ、他の書物にしたがって行ないに応じて裁かれます。

モーセは、イスラエルが金の子牛を拝んで罪を犯したとき、こういつて主に執り成しを行ないました。「今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら——。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたが書きになった書物から私の名を消し去ってください。(出エジプト 32:32)」これは、いのちの書物のことです。イエスが、悪霊を追い出して戻って来た弟子たちに対してもお語りになりました。「ルカ 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

そして、黙示録には「いのちの書」が何度となく出てきました。例えば、サルデイスの教会で、勝利を得る者たちにこう言われました。「またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。(3:5)」イエスがここで言われているように、いのちの書の基準はイエスが、父なる神と御使いの前でその人の名を言い表してくださるのかどうか、というものです。私たちが最後の審判に行きます。その時に、「ああ、この人は知っているから」とキリストが言ってくださるのです。だから、行ないの原理ではなく、神が私たちを知っているという、いのちの原則なのです。

けれども、「死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。」と言っています。千年間、復活せずにいる死んだ人々は、いのちの書に書き記されておらず、他の書物によって、その行ないに応じてさばかれているのです。

ここに恵みの原理があります。すべての人が行ないに応じてなら、裁きに服さないといけません。しかし、御子が罪のための供え物となってください、身代わりに私たちの罪、咎を受けてくださった、

ということであります。キリスト者も、裁かれました。キリストにあつて裁かれました。キリストが身代わりを受けくださった裁きによって、すでにその御怒りはキリストにあつて満たされたのです。だから、今、神の和解があります。

しかし、このいけにえを拒むのであれば、イエスの成し遂げた罪の赦しを受け入れないのであれば、それであれば、自分の行いにしたがって、行いの書に記録されていることにしたがって裁かれるしかありません。

¹³ 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。

死者が海の中のように書かれています。そして、それが「よみ」とも言い換えられています。聖書において、死者が降る所です。また、地の中にあるともされています。民数記において、コラたちが陰府に下ったことが書かれています(民数 16:30)が、それは生きている時に地が割れて、地の中に落ちていったことを表しています。エゼキエル書には、エジプトなどが地の下に降りていく幻があります。そして、ヨナ書においては海底の下にあるところとして書いています(ヨナ 2:2)。

そして、ミカ書には罪を投げ入れるところとして、海を挙げています。「7:19 もう一度、私たちをあれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ込んでください。」そしてイエス様が、小さき者をつまずかせるなら、海の深みに投げ入れられたほうがましであるということをお話しました(マタイ 18:6)。このように、地の中、あるいは海底やその下に、罪が投げ入れられ、また死者が降るというように書かれています。

しかし、神の約束に期待している人と、そうでない人の間には、そうした陰府においても異なる場所に入れられていることを、イエスはラザロと金持ちの話でしておられます(ルカ 16:19 以降)。アブラハムのふところと呼ばれる所にラザロは降りて行き、金持ちは、熱くて苦しい苦しみの中にいます。そして、その間には大きな淵があり、行き来できないとアブラハムが言っています(26 節)。そして、アブラハムに対する約束、キリストについての約束を信じていた聖徒たちは、イエスが復活され、天に昇られる時に自分たちも引き連れて行かれることが、エペソ 4 章に書かれているのです。ですから、そこにいる人々はすべて、不信者ということになります。

2B 投げ込まれる死と陰府 14-15

¹⁴ それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

死は、陰府ごと、火の池に投げ捨てられます。ですから、21 章において、新しい天と新しい地には死そのものがなくなることが書かれています。コリント第一 15 章にも、「最後の敵として滅ぼさ

れるのは、死です。(16 節)」とあります。

そして「**第二の死**」とあります。「**第一の死**」とは、肉体の死です。けれども、第二もあるのだということを強調しています。午前礼拝で学んだとおり、ここは神の住まわれる所から外されている苦しみの場所です。21 章にも出てきます。死んだら終わりではないのです。死んで、その後に裁きがあるのです。そして、魂が肉体から引き離されるだけでなく、いのちの源であられる神からも引き離されるのだよ、ということです。

¹⁵いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

「**火の池**」は、ゲヘナとも呼ばれています。イエスが何度となく、警告しました。「**マタ 5:30** もし右の手があなたをつまづかせるなら、切って捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに落ちないほうがよいのです。」「**ルカ 12:5** 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」これが、最も恐れなければいけません。

私たちは、今、恵みの時代に生きています。良い人も悪い人も恵みが与えられています。しかし、千年王国がそうであったように、それは試されている時でもあります。果たして、主を自分の意志で恐れ敬っているのかどうか？ということです。終わりの日は、隠れているものが明らかにされる時です。そして、裸のようにされて、隠れていることをすべて申し開きしないとイケません。私たちは、恐れる必要のないものを恐れ、本当に恐れなければいけないことを犠牲にします。人目が気になって、まことのいのちであるイエスのところに来ない。自分の犯した罪が明らかにされるのを恐れて、かえって、すべてを明らかにする神の裁きの下に入ることになります。主は、今、救いを受け取りなさいと言われます。恵みをむだにしないようにしましょう。